



日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第7号 / Boletín Núm. 7

2004年1月15日 / 15 de enero de 2004

事務局

〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9

日本学会事務センター

Tel: 03-5814-5801 Fax: 03-5814-5820

ホームページ: <http://www.soc.nii.ac.jp/ajh/index.html>

編集局

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6

京都外国語大学イスパニア語学科(坂東研究室)

Tel: 075-322-6121 Fax: 075-322-6246

巻頭言

志賀一郎 (愛知県立大学大学院 国際文化研究科教授)

ヨーロッパへ行った日本人はレディーファーストがマナーだからと、誰もがレディーファーストを実践する。フェミニストを自認する女闘士たちでさえ、嬉々としてレディーファーストを受け入れている。

考えてみれば、おかしい話ではないか。レディーファーストは女を男のマスコットの存在と考え、一人前の人間として認めていないことの表れではないのか。

歴史的に見ても、女性は男性のマスコット、モルモットの存在である限り、大事にしてもらえた。男性に伍して生きようとすると大きなリスクを覚悟せねばならなかった。そのリスクを避けたいために女性作家は男性名で通した。たとえば、イギリスではジョージ・エリオット (George Eliot 1819-80 本名 Mary Ann Evans) やブロンテ姉妹がそうである。ブロンテ三姉妹 (Charlotte, Emily, Anne) は、1846年に詩集を共同出版するが、少しも売れず深い失望感を味わう。このとき、Charlotteは Currer Bell、Emilyは Ellis Bell、Anneは Acton Bell と頭文字だけ同じのペンネームを使い、女であることを隠した。フランスではジョルジュ・サンド (George Sand 1804-76 本名 Aurore Dupin ショパンとの恋愛は有名) が挙げられる。スペインでは Fernán Caballero (1796-1877 本名 Cecilia Böhl de Faber) ががんばった。

それが、1970年ごろから女性解放運動の高まりとともに、男性中心社会が内包するさまざまな問題を指摘し、改革のうねりが各国で起こった。スペインでは *señorita* を廃し、*señora* で行くと提唱されたりもしたが、アメリカでの Miss, Mrs. にかわる Ms. なる新語が定着しなかったのと同じ途を歩むこととなった。

日本でも、「婦人部」、「婦人教員」などの「婦」を「ホウキを持つ女」という字であり、性別役割分業を意味するとクレームをつけ、「女性部」、「女性教員」と変えさせたりした。そこで気になるのが「妻」の呼称である。これも「ホウキを手を持つ女」を意味するのに、フェミニストたちはどうして問題にしないのだろう。しかも「ツマ」の音は「刺身のツマ」からきている。旦那が「刺身」で女房が旦那の引き立て役の「ツマ」なのだ。

【記念講演報告】

“El problema de España”
Profesor José Luis Abellán
Universidad Complutense

Alberto Cañas (Universidad de Hokuriku)

“No es que España esté enferma, está dormida o muerta. Si dormida, despertarla; si muerta; resucitarla. Y si nunca la tuvimos, crearla”

La cita, intencionadamente descontextualizada y anónima, sirve de introducción al tema tratado por el profesor José Luis Abellán en la conferencia dictada durante el cuadragésimo noveno Congreso de la Asociación Japonesa de Hispanistas: “El problema de España”.

Conocedor de las circunstancias, el Catedrático de la Universidad Complutense y Presidente del Ateneo de Madrid se dirigió a los numerosos hispanistas congregados en el auditorium de la Universidad de Ritsumeikan desde la posición del científico que, estudioso de la historia, se preocupa por las cuestiones filosóficas subyacentes al hecho histórico y sus verdaderos protagonistas: España y los españoles. Y lo hizo de modo magistral, como no podía ser menos para el autor de la monumental *Historia Crítica del Pensamiento Español*, al estilo del más avezado navegante en ruta hacia las profundidades del ser mismo de España.

Fueron sus lecturas infantiles de la Generación del 98: “España tiene un problema, yo soy español, debo tener un problema” las que le llevaron, años más tarde y durante toda una vida, a plantearse el estudio científico del tema: ¿Cuál es el problema de España?

Al hilo del decurso histórico, distingue Abellán entre síntomas del problema (la decadencia, las guerras, el exilio, la cárcel y la marginación de los intelectuales) y el problema mismo (la definición de la unidad nacional; el dogmatismo y el miedo o aversión a la novedad –misoneísmo–; la continuación de la tradición imperial, perdido el Imperio, a fin de mantener la unidad cristiana de Europa; la evangelización de los dominios latinoamericanos; el regalismo como medio para superar el ultramontanismo; la confesionalidad constitucional del Estado; la libertad de enseñanza y de educación; el lastre histórico que supuso el carlismo; y el llamado medio siglo de oro) para, desgranando ordenada y sistemáticamente las etapas de la Historia de España, acercarnos a su tesis fundamental: “España no es un ser ontológicamente adscrito a una forma sino, muy al contrario, un ente histórico abierto a las libres determinaciones de sus ciudadanos: los españoles, protagonistas únicos del hecho histórico español”.

Dicho de otro modo, pero sin variación de contenidos, España ha vivido una difícil modernidad, de espaldas a Europa y al margen de la forma política del Estado nación, no por un designio inevitable de la historia sino por razón de la

propia mentalidad de la época.

Pero, como anticipara Ortega y Gasset en 1930 “la modernidad ha terminado”, estamos en la postmodernidad y, concluye Abellán, “el problema de España se reduce a un pseudo problema”.

Y, para concluir su exposición —en la que no faltó la referencia a la paradoja histórica del acercamiento intelectual de Claudio Sánchez Albornoz con Rafael Calvo Serer y de Pedro Laín Entralgo con Américo Castro, pese a su muy diferente entorno político vital—, Abellán cita al historiador Rafael Altamira para presentarnos la estampa de una España del porvenir en el marco de “una civilización española, de los pueblos que hablan español, que entronca con el humanismo renacentista español”.

Una España, por seguir su propio símil, que “no habiendo encontrado su traje (la forma del Estado nación, propio de la modernidad) a tiempo, sea capaz de, incorporada plenamente a la contemporaneidad, diseñar su propio vestido”.

“No es que España esté enferma, está dormida o muerta. Si dormida, despertarla; si muerta, resucitarla. Y si nunca la tuvimos, crearla”. Unamuno, en representación del intelectual comprometido con la sociedad a través del ensayo. Y, para terminar esta breve reseña, en opinión de Abellán “formalización de la filosofía y el pensamiento en la cultura española”. Brillante y oportuno punto final de la intervención del maestro José Luis Abellán ante nuestro congreso de hispanistas y, por ello, interesados en la cultura española.

【原稿募集】

本誌『会報』の原稿を募集しています。下記のような項目など特に分野は問いません。スペイン語圏に関する原稿をどしどしお寄せください。

- 国内外の学会の案内と報告
- 国内の学術講演会および行事の案内と報告
- スペイン語圏に関する新刊書（和書・洋書）の紹介
- その他

（使用言語：日本語もしくはスペイン語）

（原稿分量：原稿用紙四百字詰 1000～1400 字）

第 6 回スペイン語学国際学会報告

小池和良（拓殖大学）

ドイツのライプチヒ大学で 2003 年 10 月 8 日より 11 日まで、VI Congreso Internacional de Lingüística Hispánica（第 6 回スペイン語学国際学会）が開催された。この国際学会はライプチヒ大学の G. Wotjak 氏の発案で 1978 年から 5 年毎に開催されている国際会議で、今回で第 6 回目を迎えた。スペイン語圏以外で開催されるスペイン語学に関する数少ない国際会議の一つである。当初は動詞価理論に関する研究発表の場であったが、回を重ねるにつれて、大会の規模も大きくなり、1988 年の第 3 回目から統一テーマを掲げて開催されるようになった。1988 年の第 3 回目は「動詞」、1993 年の第 4 回目は「動詞と副詞」、そして前回の 1998 年の大会は「名詞と形容詞」が統一テーマであった。特定のテーマに関する基調講演や研究発表が行われるので、そのテーマの最新の研究動向を知ることができ、参加者のほぼ全員と意見を交換することができる。今回の統一テーマは「意味論と統語論のインターフェイス」で、それに関する基調講演と研究発表およびパネルディスカッションが行われた。今回のテーマには統語論と意味論の接点を探ろうとする主催者の試みと期待が感じられた。

地理的な関係で、ドイツに近い国（デンマーク、オーストリア、ポーランド、チェコ、ベルギー）やスペインからの参加者が多いが、アメリカ大陸からの参加者も少なくない。今回の参加者は約 150 名で、スペインから 100 名前後、ドイツから 30 名、その他アルゼンチン、メキシコ、キューバ、チリ、ペルー、日本、ベルギー、デンマークおよびチェコから参加があった。日本からは報告者一名だけの参加だったが、日本人の研究者としてはマドリードの Univ. Pontificia Comillas の森本氏も参加した。スペイン語学やロマンス語学の第一線で活躍する著名な研究者も多く参加した。また今回は Wotjak 氏が 2007 年に退官するため、彼の指揮下で行われる最後の大会ということもあって、多くの友情出演があった。ほとんどの参加者が研究発表を行い、報告者も *Colocaciones complejas en el español actual*（現代スペイン語の複合コロケーション）の題目で発表を行った。今回は参加者の数が前回より大幅に増えたために、5 つの分科会に分かれて発表が行われた。研究発表の他に、以下に示す 5 つの基調講演が行われた。

V. Demonte: La interfaz entre sintaxis y semántica

I. Bosque: Cuatro sentidos del concepto de "colocación"—teoría y aplicaciones

L. Fernando Lara: ¿Es posible una teoría del léxico?

C. Hernández Alonso: Panorama de los enfoques funcionalistas actuales en España: críticas y desiderata

Á. López García: Una caracterización cognitiva de la actancia: ¿flujo pregnante o forma saliente?

基調講演や研究発表は、これまでと同様に会議録または論文集の形で出版される予定である。なお、会議のプログラムや研究発表のレジュメ、参加者名簿などはホームページ(<http://www.uni-leipzig.de/~ialt/hispania2003/index.htm>)で公開されている。研究発表のレジュメはダウンロードすることができる。

2003 年度第 1 回理事会

日時：2003 年 6 月 1 日 13:00～16:00

場所：モンブランホテル（名古屋駅前）第二会議室

1. 前回議事録（2002.10.19）を承認。
2. 報告事項
 - 1) 退会者 6 名があった（物故者 3 名を含む。別紙参照）。
3. 審議事項
 - 1) 入会申請 7 件を承認（別紙参照）。
 - 2) 地域研究学会連絡協議会設立大会について、日本イスパニヤ学会の同大会参加を検討。
 - 3) 2003 年度第 49 回大会の準備、開催要項を審議。現在までの決定事項は以下の通り。

会場：立命館大学「びわこ・くさつキャンパス」

期日：10 月 25 日（土）、26 日（日）

基調講演：José Luis Abellán 氏（マドリード大学）

- 4) 『HISPÁNICA』について
投稿規程は、各理事の意見を取りまとめ再検討する。
2004 年度の学会創立 50 周年記念大会に向け、CD-ROM 化を実施。バックナンバーの在庫状況を確認の上、CD-ROM 化後は処分を検討。
会員が査読不可能な分野の投稿については、非会員に査読を依頼する。その場合は薄謝を送る。
- 5) 本年度中に、メールアドレスおよび詳細な専門分野を含む住所録の更新を実施する。10 月初旬に各会員へ変更事項などを問う。
- 6) 2004 年の学会創立 50 周年記念大会について、開催要項を審議。講演者一名は Víctor García de la Concha 氏に内定。
- 7) 2002 年度会計決算報告を承認。
- 8) 本学会のホームページ（<http://www.soc.nii.ac.jp/ajh/>）について

2003 年度第 2 回理事会

日時：2003 年 9 月 21 日 13:00～16:00

場所：モンブランホテル（名古屋駅前）第一会議室

1. 前回議事録（2003.6.1）を承認。

2. 報告事項

- 1) 退会者 3 名があった（別記参照）。
- 2) 会報第 6 号の会員への送付が報告された。次号は 12 月末に発送する予定。

3. 審議事項

- 1) 入会申請 4 件を承認（別記参照）。
- 2) 地域研究学会連絡協議会設立大会へのイスパニヤ学会の参加を承認。
- 3) 2003 年度第 49 回大会のプログラムの承認、および司会者の決定。
José Luis Abellán 氏の講演は、“Problema de España”を依頼することに決定。
- 4) 学会創立 50 周年記念大会について、開催要項を審議。
第一部講演者は Víctor García de la Concha 氏に内定。第二部講演者は未定。
- 5) 来年 3 月実施予定の理事選挙を担当する選挙管理委員長を、本田理事に決定。
江藤会員と柳沼会員に選挙委員を務めてもらえるよう依頼する。
- 6) 本年度中に住所録更新を実施する。
- 7) 理事のメーリングリストを作成し、今後理事会開催の連絡はメーリングリストを使って行うことに決定。

2003 年度第 3 回理事会

日時：2003 年 10 月 25 日 11:00～12:00

場所：立命館大学 びわこ・くさつキャンパス 3 階 K307

1. 前回議事録（2003.9.21）を承認。

2. 報告事項

- 1) 『HISPÁNICA』第 47 号には、言語 6、文学 5、研究ノート 1 を掲載し、大会後入稿する予定。
- 2) 2003 年度第 49 回大会のプログラムの変更事項を報告。

3. 審議事項

- 1) 入会申請 1 件を承認（別記参照）。
- 2) José Luis Abellán 氏の講演原稿を、『HISPÁNICA』第 47 号の巻頭に掲載することを決定。
- 3) 『HISPÁNICA』の投稿規定について
日本語版投稿規定がすでに承認されているため、現在修正中の欧文版投稿規定の承認を総会に諮る必要はないことを確認。
- 4) 学会創立 50 周年記念大会では、来年 3 月に任期終了となる木下会長が実行委員長となり、委員会を組織すること事を承認。
- 5) 2003 年度会計報告と監査報告を承認。
- 6) 2004 年度予算案を承認。

日本イスパニヤ学会第49回大会プログラム

[期日] 2003年10月25日(土)～26日(日)

[会場] 立命館大学びわこ・くさつキャンパス(BKC):「エポック立命21」

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1 (<http://www.ritsumei.ac.jp>)

Tel. 077-566-1111 (大学代表) / 077-561-2700 (会場直通)

[連絡先] 山崎信三研究室 Tel. [REDACTED]

e-mail: [REDACTED]

第1日目(10月25日)

理事会 11:00～12:00 (3階 K307会議室)

総会 13:00～13:50 (1階 エポックホール)

研究発表

《分科会【語学】》(1階 エポックホール)

司会: 福嶋教隆

14:00～14:30 和佐敦子「平叙文における *es que* の意味機能」

14:30～15:00 西村君代「現代スペイン語における関係形容詞 *cuyo* とその代替表現について」

(休憩)

司会: 堀田英夫

15:15～15:45 下田幸男「使役構文における再帰代名詞の脱落現象」

15:45～16:15 高橋覚二・伊藤ゆかり「試験問題自動作成の試み」

《分科会【文学】》(3階 K309会議室)

司会: 有本紀明

14:00～14:30 保崎典子「ローサ・モンテロ:『デルタ関数』のルシア像をめぐる考察」

14:30～15:00 岡本淳子「Antonio Buero Vallejo の *La doble historia del doctor Valmy* にみられる抑圧構造とその解体の試み」

(休憩)

司会: 佐竹謙一

15:15～15:45 磯野吉美「検閲と劇作家 —アントニオ・ブエロ・バリエホの場合—」

15:45～16:15 太田靖子「タブラーダ・ハイカイの〈新しみ〉 —『白鳥』のハイカイをめぐる—」

《分科会【文化】》(3階 K310会議室)

司会: 角田哲康

14:00～14:30 内田千重子「サルバドール・ダリの腐敗と聖なる客観性の概念 —その傾倒への背景—」

14:30～15:00 井上幸孝「植民地時代初期の先住民記録に見るメシーカ史 —『テペチパン絵巻』、『クアウティラン年代記』、テソソモクの記録文書を

中心に―」

(休憩)

司会 : 本田誠二

15:15~15:45 米田富彦「日欧交渉意外史：フェルナンデス・コルドバと織田信長の比較戦略論 ―西洋軍事革命の日本におけるシンクロニシティーに関する―考察―」

15:45~16:15 柳原孝敦「地上の楽園に楽鳴り渡る ―カルペンティエールとベネズエラ文化（1945 - 1959）―」

(休憩)

講演会（1階 エポックホール）

司会 : 山崎信三

16:30~17:30 Dr. José Luis Abellán (Universidad Complutense de Madrid) :
“El problema de España”

懇親会 17:45~19:45 (ユニオンスクエア 2 階、会費 5000 円)

第 2 日目 (10 月 26 日)

研究発表

《分科会 [語学]》（1 階 エポックホール）

司会 : 中岡省治

10:00~10:30 木村琢也「HLH* トーンアクセントの境界画定機能」

10:30~11:00 原 誠「スペイン語創出文法における三つの話法と指定要素」

《分科会 [文化]》（3 階 K310 会議室）

司会 : 坂東省次

10:00~10:30 Analía Vitale “Sexismo lingüístico en el español : Actores sociales, debates y supuestos”

10:30~11:00 Darío González “Grandes fiestas de Amerindia”

..... (閉 会)

【備考】

休憩スペース : 1 階ロビー、3 階「談話コーナー」

書籍展示会場 : 3 階 K304・K305、1 階ロビー

当日事務局 (控室) : 3 階 K302

49° CONGRESO DE LA ASOCIACIÓN JAPONESA DE HISPANISTAS

25 y 26 de octubre de 2003

Universidad de Ritsumeikan – Biwako Kusatsu Campus [Epoch Ritsumei 21]

〒525-8577 Nozihigashi 1-1-1, Kusatsu, Shiga

<http://www.ritsumeai.ac.jp>

Sábado, 25 de octubre

Reunión de la Junta Directiva 11:00~12:00 (3F, Sala de junta K307)

Asamblea General 13:00~13:50 (1F, Salón de actos)

PONENCIAS

[SECCIÓN: LINGÜÍSTICA] (1F, Salón de actos)

14:00~14:30 Atsuko WASA “Función semántica de *es que* en las oraciones declarativas”

14:30~15:00 Kimiyo NISHIMURA “Sobre el relativo adjetivo *cuyo* y sus reemplazos en el español actual”

(Descanso)

15:15~15:45 Yukio SHIMODA “La omisión de los pronombres reflexivos en las perífrasis factitivas”

15:45~16:15 Kakuzi TAKAHASHI, Yukari ITO “Intento de creación automática de exámenes”

[SECCIÓN: LITERATURA] (3F, K309)

14:00~14:30 Noriko HOZAKI “Estudio sobre la imagen de Lucía en *La función Delta* de Rosa Montero”

14:30~15:00 Junko OKAMOTO “*La doble historia del doctor Valmy* de Antonio Buero Vallejo: El mecanismo de la represión y el intento de desmontarlo”

(Descanso)

15:15~15:45 Yoshimi ISONO “La censura y los dramaturgos —El caso de Antonio Buero Vallejo—”

15:45~16:15 Seiko OTA “Tablada, innovador: Reflexiones a partir del haikai *El cisne*”

[SECCIÓN: CULTURA] (3F, K310)

14:00~14:30 Chieko UCHIDA “*Putrefacción y santa objetividad* en Salvador Dalí —el trasfondo de estas predilecciones—”

14:30~15:00 Yukitaka INOUE "La historia mexicana en las fuentes coloniales: la *Tira de Tepechpan*, los *Anales de Cuauhtitlán* y las crónicas de Alvarado Tezozómoc"

(Descanso)

15:15~15:45 Toshihiko YONEDA "La historia sorprendente de la relación entre Europa y Japón del siglo XVI: La estrategia comparativa entre Fernández de Córdoba (El Gran Capitán) y Nobunaga Oda —Una observación sobre la sincronía de la Revolución Militar en Japón —"

15:45~16:15 Takaatsu YANAGIHARA "En el Paraíso Terrenal resuena la música —Carpentier y la cultura venezolana, 1945-1959—"

(Descanso)

CONFERENCIA (1F, Salón de actos)

16:30~1730 Dr. José Luis Abellán (Universidad Complutense de Madrid) :
"El problema de España"

RECEPCIÓN (Cena de amistad) 17:45~19:45 ("Unión Square" 2F, 5.000 yenes)

Domingo, 26 de octubre

PONENCIAS

[SECCIÓN: LINGÜÍSTICA] (1F, Salón de actos)

10:00~10:30 Takuya KIMURA "La función delimitativa del acento tonal HLH**"

10:30~11:00 Makoto HARA "Los tres estilos (directo, indirecto e indirecto libre) y el elemento especificador en la gramática productiva española"

[SECCIÓN: CULTURA] (3F, K310)

10:00~10:30 Analía Vitale "Sexismo lingüístico en el español: Actores sociales, debates y supuestos"

10:30~11:00 Darío González "Grandes fiestas de Amerindia"

. (Clausura)

2003年10月25日

日本イスパニヤ学会

2003年3月31日決算

2002年度会計報告

(2002年4月1日～2003年3月31日)

収 入	支 出
2001年度からの繰越金 3,347,386	
正会員会費 2,856,000	
賛助会員費 180,000	
海外会員会費 17,100	
BACK NO. 収入 18,000	
前受会費 24,000	
銀行預金利息 44	
2001年大会参加出版社よりの寄付金繰越金 45,150	
銀行口座開設費 100	
	センター事務経費 407,293
	センター業務委託費 369,663
	学会誌・会報発行経費 739,179
	大会運営費 300,000
	会議開催費 46,080
	通信・交通費 84,140
	手数料 2,835
	保管料 122,430

収入合計 ￥6,487,780

支出合計 ￥2,071,620

収 支 差 額 ￥4,416,160

会計委員 角田哲康



監査の結果、異常なきものと認めます。

2003年 10 月 20 日

会計監査委員 藤田一成



2003年 10 月 21 日

会計監査委員 長谷川信弥



2002年度期末残高内訳	
学会事務センター預かり金	¥4,021,570
UFJ銀行普通預金	¥394,590
計	¥4,416,160

2003年10月25日

日本イスパニヤ学会
2004年度会計案

収 入

会 費 (8000円×370名)	296万円
------------------	-------

計 296万円

支 出

		2002年度
1. 学会誌・会報発行経費	100万円	739,179円
2. 大会開催費用	30万円	300,000円
3. 学会事務センター事務経費 (注1)	45万円	407,293円
4. 学会事務センター業務委託費	45万円	369,663円
5. 理事会開催費用	6万円	46,080円
6. 庶務委員経費	6万円	
7. 保管料 (注2)	17万円	122,430円
8. 通信・交通費 (注3)	15万円	84,140円
9. その他 (注4)	5万円	

計 269万円

収支差額 27万円

注1 会費請求書、学会誌・会報等の郵送料、コピー代、事務通信費等

注2 学会誌・会報の保管委託に関する費用

注3 理事会開催に伴う庶務委員等の交通費、関連する編集作業および郵送料金、学会事務センターに依頼しない郵送料金等

注4 コピー代、送金手数料、消耗品等

作 成

会計委員 角田哲康

日本イスパニヤ学会第 49 回大会（於立命館大学BK C）会計報告

【支出】

校舎施設等使用料（小会議室 1、中会議室 3、大会議室 2、大ホール 1）	79.800
会場設営（吊り看板 6000/900 1 枚、立て看板 1800/900 2 枚、 誘導パネル 600/600 1 枚）	57.330
昼食弁当（理事用 1.500 × 14） （大会組織委員用 700 × 10）	28.000
書類コピー代（理事会資料、総会資料、発表者レジュメ）	22.050
休憩室用雑貨（コーヒー、紅茶、緑茶、ウーロン茶、ジュース、砂糖、 クリープ、スプーン、紙コップ、紙プレート、紙ナプキン、 ボックスティッシュ、マドラー、布巾、ゴミ袋、菓子）	19.690
事務用品（筆記用具、マグネット、両面テープ、セロテープ、鉄、 ストップウォッチ 3 個）	8.337
ネームプレート・領収証綴	11.340
講演者用備品（録音テープ、ミネラルウォーター、胸リボン）	1.333
通信費（封筒、切手、フロッピー）	2.385
学生アルバイト代（時給 900 円×のべ時間 96） （96 時間内訳：学生 A, B, C, D, E: 各 11.5、学生 F: 10、 学生 G, H, I: 各 8.5、学生 J: 3）	86.400

小計 316.665 円

日本学会事務センター学会事業部取り扱い分（発送総数 391 件、発送停止者 17 件）	
官製葉書（50×408）	20.400
葉書印刷代両面（30×408）	12.240
案内印刷代（B4）両面（30×395）	11.850
2 点同封・3 回折作業（20×391）	7.820
発送手数料（センター封筒使用、25×391）	9.775
切手代（80×391）	31.280

小計 93.365 円

支出総額 410.030 円

【補助金】

開催校立命館大学より 500 円×実参加人数 136 人 68.000 円

【備考】

教材展示販売担当業者より、寸志・展示料として 70.000 円
および懇親会用に赤・白ワイン各 1 ダースの差し入れ

以上

【自著紹介】

ホルヘ・デ・モンテマヨール、ヒル・ポーロ

『ディアナ物語』（本田誠二訳、南雲堂フェニックス、2003）

本田誠二（神田外語大学）

16 世後半に生まれたスペイン独特な文学ジャンルに、神秘主義文学やピカレスク小説と並んで牧人小説がある。本書はその嚆矢となったホルヘ・デ・モンテマヨールの『ディアナの七つの書』（バレンシア、1559?）と、その続編であるガスパル・ヒル・ポーロの『恋するディアナ』（バレンシア、1564）を合本にしたものである。ともに本邦初訳になるが、なぜ日本で今まで翻訳がなされてこなかったかという点、牧人小説というものが、騎士道小説とおなじような娯楽書、文学性のないロマンス程度にしか理解されてこなかったことにも原因があろう。今回、翻訳したのはそうした先入観を打ち破り、牧人小説が近代小説の目指したアイデアリズムとリアリズムの統合、人間そのものを描く全体小説『ドン・キホーテ』の先駆けであったことを、明らかにしたいと考えたからである。

セルバンテスが『ドン・キホーテ』の中で、みずからの牧人小説『ラ・ガラテア』（1585）をふくめた牧人小説一般を、〈知性の書〉として〈娯楽本〉の騎士道本と一線を画したことに見てとれるように、この文学ジャンルは作者の知性に対応すべく、読者にそれ相応の知性を要求するものであった。したがって作品には散文の恋愛物語のあいだに多数の詩が挿入され、牧人に身をやつした宮人たちのあいだで、ネオプラトン主義的な愛の教説や哲学の論争が交わされ、あるいは当時のすぐれた女性や文人たちの業績や横顔が紹介されたりするのである。おそらく当時の教養人たち（とりわけ宮廷の貴婦人たち）にとつての、知的娯楽であったことはまちがいない。しかし大型版の騎士道本にくらべて小さくポケットに入ってしまうほどの、今日という文庫本のようなサイズの牧人小説は、印刷術の普及とあいまって、宮廷人だけのものにとどまらず、広く一般の人気を博したと思われる。それは若い女性で、牧人小説をポケットにしるばせていない者はいなかった、と伝えられているからである。

モンテマヨールが『ディアナの七つの書』で問題にしようとしたのは、牧人というもっとも自然に近い（ということは、もっとも純粋なキリスト教的生き方に近い）世俗の人間たちのあいだに起きる、男女間のさまざまな愛の問題にいかなる解決を与えるかというものであった。真実の愛から生まれる心の苦しみに解決を与えるのは、フェリシアという賢女であり、苦しむ者たちは彼女が処方した霊水（宗教的コンテクストに置き換えると、聖母マリアの仲介による神の恩寵）を飲むことによって救済される。いわばこの書は、世俗的異教文学のかたちをとってはいるものの（したがってバルデスの禁書目録から外された）、当時、ユダヤ改宗者の間で広がっていた福音主義（エラスムス主義）の思想を暗示的に述べ伝えんとしたものである。ここには人間は愛に根ざした苦しみからは、神の恩寵なくして逃れ得ない、というモンテマヨールの改革派的宗教思想が窺える。

モンテマヨールを書き継いだヒル・ポーロは、そうした宗教思想に異を唱えるかたちで、欲望を理性（ロゴス）によって抑制することを強調し、愛のゴールを秘蹟としての結婚におくカトリック的禁欲主義を対置している。セルバンテスはモンテマヨールのフェリシアの霊水を批判し、ヒル・ポーロの指し示した方向で、自らの牧人小説『ラ・ガラテア』を構想したわけだが、その中で描いたさまざまな愛のエピソードは、

かたちを変えて、『ドン・キホーテ』や『模範小説集』、『ペルシーレス』の中に再現されている。したがって牧人小説はセルバンテスが描こうとした愛の理念の原型を与えたという意味で、きわめて重要な意味をもっていた。ドン・キホーテのドゥルシネアに対する精神的愛の破たんは、まさに牧人小説で描かれた、理想主義的・プラトンの愛に対するパロディーだったのである。

【新刊紹介】

ジョン・M・リプスキ『ラテンアメリカのスペイン語—言語・社会・歴史—』
(浅若、牛島、梅田、岡本、立岩、中川、米田訳、南雲堂フェニックス、2003)

岡本信照 (天理大学)

本書はまさしく表題通り、ラテンアメリカの全スペイン語使用国を対象としている。いわば、これまでのラテンアメリカ・スペイン語研究の集大成と呼べる一書である。英語の原題は *Latin American Spanish* ときわめてシンプルだが、盛り込まれている内容は、スペイン語変種の言語学的分析に留まらず、ラテンアメリカの社会情勢、民族学、歴史といった言語外的要素の言及にも事欠かない。この点を反映させるべく、「—言語・社会・歴史—」という副題は訳者が独自に付したものである。本書の大枠は二部構成になっており、第1部は総論、第2部は各論となっている。

従来、ラテンアメリカのスペイン語の特徴としてよく挙げられるものといえば、*seseo* ([θ]のS音化)、*yeísmo* ([ʎ]のY音化)、音節末の/s/の気音化または脱落といった音声現象、*voseo* (túの代わりに vos 使用) および *vosotros* の欠如に代表される2人称代名詞に関する文法現象、そしてスペイン本国の古語 (*arcaísmo*) や航海用語 (*marinerismo*) の一般的使用、あるいは先住民起源の語彙の多用など、本国とは異なる語彙使用などであろう。もちろん、本書でも前半の第1部でこれらのトピックについての入念な検証が加えられ、原著者独自の実地調査による研究成果も述べられている。しかしそれら以外にも、カナリア諸島方言との関係 (第2章)、本来ならば非容認とされるものの、ナワトル語やケチュア=アイマラ語との二言語話者がよく用いる接辞重複 (*clitic doubling*: “*Lo pongo la caja*”) (第3章)、キュラソー島で話されるパピアメントや、コロンビアのパレンケ・デ・サン・バシリオというマルーン・ビレッジに存続するパレンケロといった、アフロ・イベリア系のクレオール語 (第4章) など、非常に興味深いテーマに多くの頁が割かれている。

後半の第2部は、ラテンアメリカ・スペイン語変種の歴史的背景、先住民諸語との影響関係、音韻・形態・統語・語彙各部門の特徴が各章完結で記述的に網羅されており、本書の大きな魅力となっている。言うまでもなく国境線と言語変種の境界線を同一視することはできず、この点は綿密な実地調査を積み重ねてきた原著者自身が最もよく承知しているところであろう。しかし、ラテンアメリカ・スペイン語の全体像を把握する上で「国別」という観点は少なくとも便宜上必要であることも確かである。そうした意味で、本書は読者にこの上ない便宜を図っていると同時に、非常に大胆な試みを行ったとも言えるだろう。

【自著紹介】

『メキシコ多文化 思索の旅』（山川出版社、2003）

高山智博著

長年、「メキシコ文化」という言葉を使い慣れてきた著者であったが、いつも何かしっくりしないものを感じていた。この度、過去 20 年間に書いてきた論文などをもとに、本書をまとめるに当たって、「多文化」という用語を使ってみて、やっと胸のつかえが取れたような気がしたものである。

著者がはじめてメキシコ留学をした 1960 年頃は、国民統合とか国民文化といった言葉が氾濫し、スペイン人と先住民の双方の文化を受け継いだメスティソ文化こそがメキシコ的なのだと聞かされた。しかし実際は、白人が殆どの支配層、その下の階層を占めるメスティソ、そして社会の末端に位置する先住民との間には、経済格差が存在するだけでなく、それぞれにかなり異なる文化が見られるのである。

メキシコ革命以来の政府の政策は、先住民にスペイン語と西洋の技術を教えて、彼らを「一人前のメキシコ人」にすることであった。1962 年、INI（国立先住民庁）の長官であったアルフォンソ・カソが、「20 年後にはメキシコのインディオ問題はなくなる」と発言したのを、著者は今でもよく覚えている。しかしこうした政策は、インディオの否定に繋がるとして、1970 年代はじめには、メキシコは多文化多民族国家なりと定義しなおされ、先住民言語も教える二言語教育など、政策転換も行なわれた。またメキシコには先住民といっても 56 もの民族集団があり、その各々に固有の言語や伝統文化が存在するのである。

このようにして多文化への認識が一時、改善されたものの、1980 年代の経済危機、そして最近のグローバル化によって、いわゆるメスティソが主体といえる民衆文化や先住民の文化は、大きく変容している。殊に先住民文化には、自然との共生など、現代人が学ばねばならないものが多いにもかかわらず、中には存続の危機に立たされているものもある。彼らに対する偏見も十分には払拭されていない。1994 年に発生したチアパス州における先住民の武装蜂起でも分かるように、国内の対立は未だ解消していないのである。

これまでメキシコ史において、あまり扱われることがなかったメスティソや先住民が持つ文化の豊かさを再認識し、さらにその歴史に対する複眼的な視点の重要性を理解してもらいたいというのが、著者の願いである。

本書の構成は次の通りである。＜先住民文化＞「あるウイチョール族の生活」、「ケツアルとボラドールの踊り」；＜メスティソ文化＞「メキシコの民話と祭り」、「オアハカ 追憶の旅」；＜メキシコ文化の葛藤＞「荻田政之助と日系社会」、「オクタビオ・パス氏の思い出」、「模索するメキシコ—北米自由貿易協定とサパティスタ国民解放軍」；「メキシコ多文化 思索の旅」。

我々はとすると、ラテンアメリカをスペイン語文化圏としてのみ考えがちではなかろうか。しかしメキシコのように、多文化が特徴といえる国も少なくない。本書がそれについて再考する一助になれば、幸いである。

【自著紹介】

『現代スペイン語における“se”をともなう中間構文についての研究』
(芸林書房、2003)

石崎優子著

スペイン語においては、“se”をともなう構文が特徴のある文法構造として多くの研究者に注目されてきた。海外ではもちろんのこと、日本においても、大阪外国語大学の出口厚実先生や東京外国語大学の寺崎英樹先生の先駆的研究があり、筆者自身、直接そのお考えを伺う機会に恵まれ、その研究の深さに感銘を受け、大いに刺激を受けたものである。言語の研究が、言語の構造に着目して以来、言語理論は大きく発展してきた。特に、大部分の言語で、ダイナミックな構造の展開が見られるヴォイスの研究が盛んになったのは当然のことに思われる。言語の構造記述のひとつとして、顕著な特徴を示し、多くの言語に同じような現象が見られるということも注目を集める要因ではなかったかと思われる。しかし、筆者がここで試みるのは、どちらかと言えば、認知的立場に立脚し、言語の意味機能から研究するという方法により、個々の言語の特徴、他の言語との相違を明らかにしようという類型論的な視点である。そのため、言語の構造記述のみを目指すのではなく、なぜそのような文法構造が形成されるのか、その説明原理を求めようとしている。

以上のような意図から、多様な意味内容を表す“se”をともなう構文は、ほどよい研究対象となったわけである。ここでは、言語を自律した形式ではなく、言語の使い手が自分を取り巻く現実世界の解釈を実現する形式としてとらえようとする。それで、同一形式による多様な意味内容の表現は、ある特定言語（ここではスペイン語）が何らかの原理に基づいて形成するひとつの意味のネットワークと考え、その形成原理が解明されれば、その言語の特徴をもとらえることができると考えるのである。類型論としての展開は、他言語（ここでは日本語）との比較において、ある共通の意味に立脚したネットワークの形成の仕方を見ることで可能になると予想される。当論文では、話者の視点と動詞による意味特徴との相関性をヴォイスの実現の中に見出し、能動態がプロトタイプの他動性を表すとすれば、段階的な意味の逸脱を示す中間的な構文が存在し、それらが多様な意味を示しながらも何らかのつながりを表すネットワークを形成していることを観察している。幸い、「受身」の意味は両言語に存在するが、それを取り巻く中間的な意味のつながりは全く異なる。それがどのような原理に基づいているのか説明できれば、この論文の意図は達成されたと考える。

類型論ということで、自分が精通した言語を研究対象に選ぶことが必須であると考え、日本語と比較するという無謀な試みに挑戦することになったが、この論文を書き終えて改めて認識したのは、各言語は実に様々であるということである。

どの論文を書きあげた時も、それが刊行されたとたんに、自著の論考の未熟さや論点の甘さに愕然とさせられるが、当論文においても例外ではない。また扱ったテーマの難しさと言語理論の目覚ましい展開とで、書き上げるまでに長い年月を費やしたので、刊行した時点で、新しい文献が欠けているという状態になってしまったが、書き上げた論文を踏み台として、次のテーマにつながる一步を築いたと考え、自分を慰め、励ましている。本著は、一般の読者にとっては退屈きわまりない書であり、普通では出版が難しいのであるが、グラシアン基金の援助を受けることができ、なんとか刊行することができた。このテーマに興味をもたれる研究者の方に読んでいただければ、筆者としては無上の喜びである。

【自著紹介】

『ポケット・プログレッシブ 西和・和西辞典』（小学館、2003）

高垣敏博ほか編

本辞書編纂には当初から2つの制約があった。1つは1000ページに収めること、もう1つは2003年10月に刊行することであった。これら2つの枠の中でどこまで有益な情報が盛り込めるのかの挑戦だった。

ポケット版でありながら、できるかぎりの語数を収録しよう。和西も日常困らない見出し語数にしよう。中南米語を含めてスペイン語のバリエーションや、最新の語彙にも配慮しよう。以上が方針の柱となった。

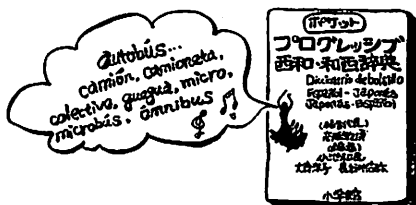
そこでまず西和には4万5000語を登録することにした。市販の中型辞典に負けない数にすることにより旅行やビジネス、場合によっては中級レベルの授業でも困らない語彙数という設定だ。ポケット版としてはよく収まったと思う。企画からわずか3年足らずで出版にまでこぎつけることができたのはひとえに編者大森洋子氏、長谷川信弥氏と11名にのぼる若手研究者を中心とする執筆者、それに編集者との緊密でスムーズな連携のおかげだろう。当然のことながら例文のスペースは十分とれなかった。それでも前置詞、接続詞、代名詞などのいわゆる機能語については編者らが担当し、できるかぎり例文や例句を入れることにした。

和西として1万5000語収録できたこともこの辞書の大きな特色である。小池和良氏の信頼できる監修により、単なる付録の語彙集ではない、ちょっとした和西小辞典が実現した。しかも「スローフーズ」や「添付ファイル」など最新語まで収められている。

また新語ということでは西和の方でも1700語の新語が採録された。宮本正美氏がインターネットで収集した最新語の多数の候補から頻度順位の高いものを可能なかぎり取り込んだ。

おそらく世界でも初めてだと思われる試みもある。『地域差』のコラムだ。たとえば、autobús「バス」を引いてみると、コラムとして camión, camioneta, colectivo, guagua, micro, microbús, ómnibus などの変異形のリストがその使用国名とともにあげられている。ここには上田博人氏を中心に10年以上にもわたって進められている世界的プロジェクト Variación Léxica del Español del Mundo (<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~ueda/varilex/index.html>) のデータベースから一般に有用だと思われるバリエーション141項目が選定されている。

こうして盛り沢山になった。時間に追われて集中したことがかえって効率的だったのかなと今思い返しているところである。



【新刊紹介】

- 明川哲也『メキシコ人はなぜハゲないし、死なないのか』晶文社 2003
- 石崎優子『現代スペイン語における“se”をとまなう中間構文についての研究』芸林書房 2003
- 伊東章『マゼランと初の世界周航の物語』鳥影社 2003
- 神渡良平『星降るカミーノ』PHP 2003
- 芝修身『近世スペイン農業—帝国の発展と衰退の分析』昭和堂 2003
- ジョン・リプスキ（浅若みどり・牛島万・岡本信照・立岩礼子・中川節子・米田富彦共訳）『ラテンアメリカのスペイン語』南雲堂フェニックス 2003
- セルバンテス懇話会編『イスパニア図書』第6号、行路社 2003
- 高松朋子／ヘスス・マロト・ロペス・デジョ『通訳案内業（ガイド）試験—スペイン語過去問題解説（平成元—14年）』法学書院 2003
- 高山智博『メキシコ多文化 思索の旅』山川出版 2003
- ホアン・マシア『ドン・キホーテの生死観—スペインの思想家ミゲル・デ・ウナムーノ』教友社 2003
- ホセ・リサル『見果てぬ祖国』潮出版社 2003
- ホルヘ・デ・モンテマヨール、ヒル・ポーロ（本田誠二訳）『ディアナ物語』南雲堂フェニックス 2003
- 南邦和『詩集 グラナダの犬』本多企画 2003
- 野谷文昭『マジカル・ラテン・ミステリー・ツアー』五柳書院 2003
- 松倉康夫『ガウディの装飾論』相模書房 2003
- ホセ・マリア・アルゲダス（杉山晃訳）『アルゲダス短編集』彩流社 2003
- マーティン『ピカソの戦争《ゲルニカ》の真実』白水社 2003
- バリオ編『チェ・ゲバラ』原書房 2003
- 天理大学アメリカス学会編『アメリカス学の現在』行路社 2003

【国際学会】

V CONGRESO INTERNACIONAL CERVANTES Y EL TEATRO
7-19 diciembre de 2003 lugar: Florencia (Italia)

VII CONGRESO NACIONAL DE HISPANISTAS
19-21 de mayo de 2004 lugar: Tucumán (Argentina)
Correo-e: flawia@tucbbs.com.ar/lilianmass@hotmail.com

XV CONGRESO DE LA ASOCIACION INTERNACIONAL DE HISPANISTAS
19-24 de julio de 2004 lugar: Monterrey (México)
<http://humanidades.mty.itesm.mx-congresoAIH>

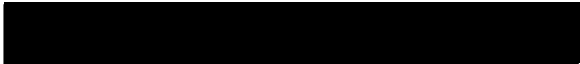
CONGRESO MUNDIAL EDUCACION EN CLAVE LATINA: “LA VOZ EN EDUCACION DE LOS PUEBLOS DE LENGUAS Y CULTURAS LATINAS”
15-18 de septiembre de 2004 lugar: A Coruña (España)
Correo-e: d133194@usuc.es

【会員の異動】

新入会員

牛田千鶴（南山大学）

研究テーマ：1)「アメリカ合衆国におけるラテンアメリカ系移民児童とバイリンガル・バイカルチュラル教育」2)「ニカラグアの教育開発における国際協力の課題」



瀧野正富（兵庫県立須磨友が丘高等学校）

研究テーマ：ひとつの文学作品の西語版、英語版、日本語版の内容にどのような微妙な変化があるかに関して



中島さやか（サンティアゴ大学人文学部）

研究テーマ：1)「チリ現代史（文化史）」2)「チリにおける文化の制度化の歴史 アート、体制、大学」



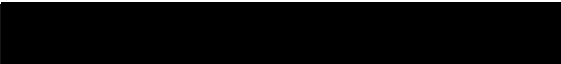
宮下和大（東京外国語大学大学院）

研究テーマ：「名詞従属節中の定形動詞の法について」



藤田健（北海道大学大学院文学研究科）

研究テーマ：「ロマンス語統語論、生成文」で、現在の研究テーマは「スペイン語を含むロマンス諸語の代名詞クリティック及び不定詞補文の統語的分析」



退会者

Manuel Silgo、大久保光夫、熊谷明子

【編集後記】

『会報』第7号をお届けいたします。学会活動の活性化を目的に会報刊行の案が出され、創刊号から担当させていただきましたが、本号をもちまして私の役目も終わります。1号から本号まで、ご寄稿いただいた先生方をはじめ編集の段階でお世話になった多数の関係者には、この場をお借りして心から御礼を申しあげます。

会員の先生方にはご多忙とは存じますが、これからも会報にどしどしご寄稿をいただいて、月1回の刊行は難しいとしても、春夏秋冬の年4回でも刊行されますよう期待する次第です。どうかよろしくお願い致します。（坂東省次）